

112 (今の私には) この私の書きなぐりの句に、唱和してくれる詩友とて、誰一人として存在しない。
113 心に浮かんだ詩を思いのたけ、紙に取り、書き写してみても
114 それを詠じたところで、誰かに聞いてもらうことも見せることもないので行灯の火で燃やす。
115 こうしたことを何度も繰り返しているので、恨む思いは煙とともに薄れてしまう。
116 こんなに辛いことも、前世からの因縁であろうかとあきらめの思いになる。
117 ほんの少しずつでも慾・執着心を捨て、これからは仏を信じて心の平安をもとめよう。
118 次第次第に芥の強い野菜や、生肉などをやめ、精進に務め、
119 手を合わせて仏を拝み、厚く仏法を信仰し仏に帰依せんことを願う。
120 廻心して自己の迷いに気がつき、気持ちを変えて静かに黙念し、入定の境地に入ることを習い学ぶことを知り
りたいと思う。

【十三段】

121 (私は) 今のこの世の罪業と欲望とを厭い嫌って、それらから遠く離れることとし
122 古えの真の悟りを、謹んで敬うことにしよう。
123 (空を仰げば) 一切のものはすべて空であるという真理の月が白く穢れなく輝き
124 (地には) 仏法の妙法(絶対の真理)をあらわすという蓮の花があまねく開いているのが見える。
125 仏や菩薩が一切衆生をすくわんとする広大な誓願にうそ偽りがあるはずがなく、
126 それによって救われる幸せは十分に厚いのであるから、その誓願が作り話として空しく捨て去られるという
ことは、決してないだろう。